
『デジャブな雨』【掌編・ミステリ】

山田文公社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『デジャブな雨』【掌編・ミステリ】

【Nコード】

N4151Q

【作者名】

山田文公社

【あらすじ】

雨が降りしきるなか、僕は倒れていた。それが死を間近にしながら、降り注ぐ雨を見つめていた。

見つめていたはずだった……。

『デジャブな雨』 作：山田文公社

アスファルトを踏みしめる人々の足。空から雫が落ちてきて、灰色の地面を黒く染め上げていく。辺りには雨の匂いが立ちこめて、人々は降り注ぐ雨から逃れるように足早に道を駆けていく。

頬にあたる雨粒が冷たくて心地よい。やがてアスファルトからはね跳ぶほどに雨は強く降り出した。少しずつ体温が奪われていく。地面に手をつき起きあがろうとしても、体は鉛のように重くて動く気配がなかった。寒気が全身を襲い、刺された部分がじんじんと痛み、感覚が麻痺しているのがわかった。

「死ぬ……」

それは比喻でも冗談でもなく、事実だった。地面には先ほどと変わらず、水滴が激しく跳ねているのが目に映った。まぶたをゆつくりと閉じる。雨音が耳を打つ。クラクションがどこかで鳴り響いたのが聞こえた。僕はしばらく眠る事にした……。

雨音が聞こえたのはしばらくの間の事だった。まどろみが全身を包み、失われた体の感覚が時間から遊離して離れていく。

騒々しくなり響く目覚ましだが、ベットの脇にあるテーブルの上で存在を主張していた。手を中空へと投げ出して、静寂を破り安息を奪い去ろうとする存在を手探りで探す。冷たい金属質の縁が手に触れる。円形状の背面は小さな突起をだし、触れる指先にほどよい刺激を与えた。四角い突起が指にふれると、それを下へと押し下げる。目覚ましはベルを鳴らすのを止め、辺りに再び静寂が訪れた。そう……だ、今朝はこうして鳴り響く目覚ましを止めて、そのまま深い眠りについた。そのおかげでバイトを遅刻して、店長から延々と

怒鳴られる羽目になったのだ。

自然に目が開き、布団からゆっくりと体を起こした。先ほど見たのは夢だったのだろうか、体はどこも濡れていないし、外は雨が降っている様子など、どこにもない。小首を傾げて考える。夢にすることはできすぎていた。それがまるで必然のような態度であったから。

『どうやらこれは夢ではなく現実のようだ』

その結論がでるまでしばらくかかったが、ようやく判ったのは、良く出来た夢を見たと言うことだった。しかしあまりに詳細でそれが夢だと思えないほどに、現実味に溢れていた。

「夢か……」

あまりの出来事にしばらく僕はベットの脇に立ちつくしていた。やがて時間に余裕の無いことに気づき慌てて着替えて職場へと向かうのであった。

しかし遅刻はしなかったものの、どうにも夢の内容が精確過ぎて気味が悪くなってきた。

それというのも、店長はその日鼻から毛が大量に出して僕を怒鳴っていたのだが、僕はそれを見ながら笑いを堪えつつ怒鳴られていたのだ。夢の通り店長は鼻毛を大量にはみ出させていた。そして奇妙な符号の一致がもう一つ、来る客が同じだった事だ。ガソリンスタンドの仕事なので、だいたい2日置きほどで同じ車を見るので、だいたい客は記憶する。しかしその日は特徴的な車が二台来たのだ。ハマーという外車と、この辺りでは珍しいアルファロメオという車だった。ドライバーも夢と同じ特徴的な人物でそれも一致した。起きる出来事も同じ……しばらくしてそれが予知夢ではないかと思ひ出す。内心『まさか』という思いもあるが、こうまで一致するとどうにも信用する他ない。

そうなると当然自分が刺されるのも現実に起きる訳だ。

なぜ僕は刺される羽目になったか……もうじきそれが本当かどうかが実証される。歩道を歩いて駅へと向かう道にもみ合うカップル

がいた。その女性が僕の方へと走ってくる。

「助けて！」

そう言い僕の後ろへと隠れる。顔を真っ赤にさせた男が乱暴な口調で怒鳴り散らしていた。そうここで僕は彼ともみ合いになり、男の取り出したナイフで刺されるのだ。そして髪を掴まれて路地へと捨てられる。

「走って！」

僕は背後にいる彼女の腕を掴んで走りだした。これで僕は刺される事はない。互いに懸命に走った。後ろからは男が怒鳴りながら追ってきている。でも振り向くことはなかった。

歩道に沿って走っていると、タイミング良くバスが乗客を下ろし終わり出発しようとしていたので、バスに飛び乗った。僕と彼女は肩で酷く荒い呼吸をしていた。バスの乗客の目がきになるけど、しばらく息が落ち着くまでお互い息を整うまで、あらい呼吸を繰り返していた。

「大丈夫？」

息が落ち着いた僕は胸を押さえて前屈みになっている彼女へ声をかけると、手ひらをこちらに見せて『待つて』の合図をしながら息を整えてから答えた。

「うん、大丈夫、でも君、急に走るからびっくりした」

お互いしばらく事情以外の何気ない事を話した。

「そっか、大学生なんだ、ありがとう助かったよ」

そう言いバスの前へと移動する彼女に僕は言った。

「じきに雨が降るから、気をつけて」

彼女は頷いてバスから降りていく。僕は次の次のバス停で降りた。コンビニで傘を買って店を出ると、やはり雨が降ってきた。僕はお腹の部分を押さえてさする。何も無い。

「よかった」

心から安堵して僕は呟いた。

空からは無数の雨粒が降り注ぐ。徐々に激しさを増す雨が、夢と現実を曖昧にした。地面から跳ねる雨に裾を濡らしながら家路にいた。不思議な夢と現実が、突然降り始めた雨とともに一日を締めくくった。

(後書き)

お読み頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4151q/>

『デジャブな雨』【掌編・ミステリ】

2011年1月25日23時55分発行